

TTT01(出題)

詰将棋課題コンクール 第1回(出題) (2008.11.1)

ジャッジ: 伊藤正

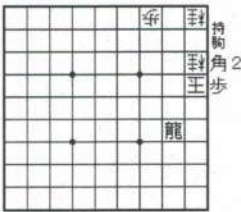
締め切り: 2008.12.31(終了)

課題 1-A (出題: 若島正)

\* 初手と最終手が同じ。7手詰。

\* ただし、駒を打つ手と、駒を動かす手は区別しない。成・不成は区別する。

(例題)



23角、同桂、15歩、同桂、23角まで5手。

赤字にしたのが、テーマの手。こういう部分をチェス・プロブレムではthematicと呼びます。

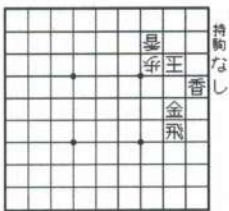
ここで出題しているテーマは、理論的には最短5手なので、例題も5手にしてありますが、課題は少し余裕を持たせて7手詰とします。このテーマにどんな肉付けができるかが、創作者の腕の見せ所です。

課題 1-B (出題: 伊藤正)

\* ある駒が、少なくとも3度動いて、元の位置に戻る。7手詰。

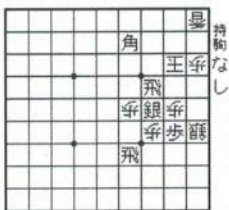
\* ただし、成って元の位置に戻るのも可とする。

(例題 1)



35金、14玉、24金、15玉、25金まで5手。

(例題 2) 伊藤正 作



24銀、14玉、33銀不成、15玉、44銀不成、26玉、35銀まで7手。

これは、チェス・プロブレム用語でrundlaufというテーマです。これも理論的には例題1のように最短5手ですが、例題2では発展させて、銀が4回移動して元に戻る7手詰を示してみました。テーマになる駒は、攻め方でも受け方でも(玉でも)かまいません。

2009-04-13 11:27 | [記事へ](#) | [コメント\(0\)](#) | [トラックバック\(0\)](#) |  
 | III |  
 トラックバックURL: <http://blog.zaq.ne.jp/propara/trackback/2/>  
 ※ブログ管理者が承認するまで表示されません

TTT01(選評)

詰将棋課題コンクール 第1回 (選評)

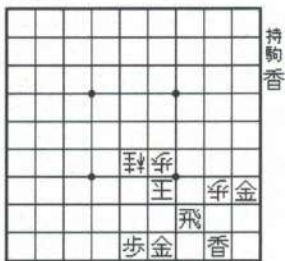
ジャッジ: 伊藤正

課題1A……投稿9作

- 01 松田圭一
- 02 山田康平
- 03 北村憲一
- 04 岩田俊二
- 05 若島正
- 06-07 橋本守正
- 08 太田慎一
- 09 馬屋原剛

優秀作

1A08 太田慎一 作



37飛、同玉、39香、38飛合、同香、47玉、37飛まで7手

佳作

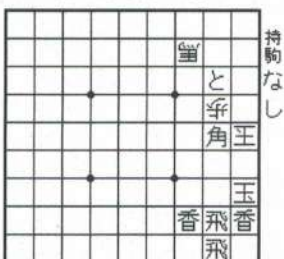
1A02 山田康平 作 b) 75銀→78銀



- a) 36竜、57玉、66竜、47玉、37馬、同玉、36竜まで7手
- b) 45馬、57玉、67馬、46玉、35竜、同玉、45馬まで7手

佳作

1A09 馬屋原剛 作



27玉、25玉、17玉、15玉、25飛、同歩、27玉まで7手

与えられた課題に対して作者はどう取り組むのか。  
 たとえば「実戦形」というテーマが設定された創作コンテストの場合

はもちろん、「煙詰を作ろう！」という作者の自主設定テーマの場合でも、これまでは「課題をクリアしたうえで既存の価値観で高い評価を受ける（例：いい手順の実現）」というのが作者の到達目標だった。また、それを達成した作品が高く評価される、というのが現実だ。

「初手と最終手が同じ。7手詰」という今回の課題ならどうか。7手だから構想を盛り込むことは困難だ。従来のコンテストなら「初手と最終手が同じ作意手順でどうかよく仕上げるか」という感覚で取り組む…、というのが方針になるだろうか。

今回のコンテストのねらいはちがう。上記の評価基準ではなく「発想力」が評価の対象である。「初手と最終手が同じ」という課題で「どのようなおもしろい発想ができるか」。だれもがすぐに思いつくパターンではないちがうパターンの表現のひらめき。それが求められている。「こんな発想があるのか！」という驚きの深さが評価基準になっているのだ。

例を挙げよう。

「初手と最終手が同じ」というテーマに対する発想という観点で選ぶと、感心させられたのは1A08だ。（1）初手を捨駒にして（2）その駒を捨てて獲得するという発想がすばらしい。この発想ができる作者のセンスに拍手。コンパクトな図でまとめたのは作者の作図力のあらわれでこれも評価できる（念のため。簡素図であることはテーマの評価には影響しない）。ただ初形で飛車は持駒の方がいいかも知れない。

佳作は1A02。ツインの設定で1つの図面で2題のテーマクリアを果たした。もちろん手順の対称性やZilahiというツボははずさない。

もう1作選ぶとしたら1A09か。従来の創作コンテスト上の取り組み方のような気もするが明き王手でテーマをクリアしたところに作者の発想の工夫を見る。

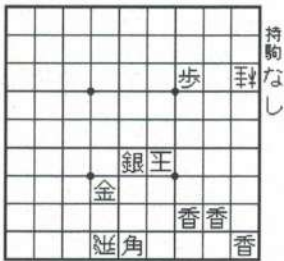
伝統的詰将棋評価基準で見ると他にすぐれた作品はあるが今回は対象外。

課題1B……投稿14作

- 01 松田圭一
- 02-03 山田康平
- 04-05 北村憲一
- 06 岩田俊二
- 07 梵失公
- 08-13 橋本守正
- 14 馬屋原剛

優秀作

1B14 馬屋原剛 作



37角、35玉、26角、24玉、15角、14玉、59角まで7手

佳作

1B09 橋本守正 作



37馬、35玉、46馬、44玉、55馬、53玉、28馬まで7手

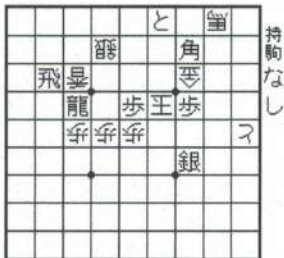
佳作

1B11 橋本守正 作



57銀、45玉、56銀、46玉、55銀、57玉、46銀まで7手

佳作  
1B12 橋本守正 作



53歩成、74香、43と、54玉、44と、64玉、54とまで7手

「ルントラウフ」というテーマからどのような発想ができるか。このテーマの実現だけなら（応募作を眺めていただければわかるように）むずかしい話ではない。

詰将棋がパズルとしてすぐれているのは、ルールの制約（81格の盤面と各駒の性能、王手連続や持ち駒使い切りなどの詰将棋としての条件）と達成したい手順に必要な創作技術のバランスが絶妙なのだ。むずかしからずやさしからず。だから創作コンテストが成立して作者の技術や発想を比べることが可能になる。今回の応募作のそれぞれが作者の発想と技術の発露である。

その中で選ぶとしたら1B09と1B14だ。ルントラウフという提案から通常発想される「玉の周りで攻駒を動かす」というイメージから脱却した最終手が鮮やか。5手目に原位置に戻す（飛躍のない）構成にしたくなるところを5手目も遠ざけた発想の勝利。配置の大仰さはもちろん評価に影響しない。あえていえばこの構想ならもっと最終手の距離を伸ばしたい。

2作のうちどちらか、ということなら14を選ぶ。09の最終手余詰（33馬）は構想に関わるだけにマイナスと評価する。

次点は1B11と1B12。どちらも駒の軌跡に創意工夫があり評価したい。ただ課題作という観点からは駒が変化しない1B11の方がテーマに忠実だ。

(2009年1月2日)

## TTT02(出題)

詰将棋課題コンクール 第2回(出題) (2009.2.1)

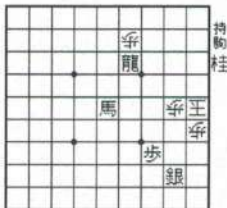
ジャッジ: 高坂研

締め切り: 2009.3.31(終了)

課題 2-A (出題: 若島正)

\* 複数解またはツイン。7手詰。

(例題1) 高坂研 作 2解 original



13龍、14飛合、27桂、26玉、44馬、同飛、15龍まで7手。

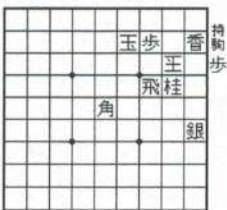
33馬、24角合、27桂、26玉、46龍、同角、15馬まで7手。

従来、解が2つ以上あるものは余詰で不完全作扱いになり、発表の場がありませんでした。今回の課題は、その複数解どうしの関連をテーマにした作品を募集しようというものです。

高坂さんのこの例題は、おそらく詰将棋では史上初の複数解作品ではないかと思います。ごらんになっていただければすぐわかるように、2解の対称性は完璧。例題として使うのがもったいないほど。

複数解のあいだにどういう関連を持たせるか、創作者のイメージーションが問われます。

(例題2) 山田康平 作 b) 23玉→13玉



a) 33飛不成、14玉、15歩、24玉、46角まで5手。

b) 22角不成、14玉、15歩、23玉、33飛成まで5手。

こちらはツインの例題(ただし5手)です。山田康平さんの5手詰作品集『うるていめいと』から引用しました。

ツインの作り方はいろいろありますが、この例題では1枚の駒を別の位置に移動した図をb)とする、というツインです。その他にも、2枚の駒の位置を交換する、持駒を変える、盤面をずらしたり回転させたりする、といったツインがチェス・プロブレムではよく作られています。

山田さんの例題では、不成が共通テーマ。

課題 2-B (出題: 若島正)

\* アンピン。7手詰。

\* ただし、アンピンされる駒は、出題図ですでにピンされていても、手順の途中で合駒として現れてもいい。また受け方の駒でも、攻め方の駒でもいい。

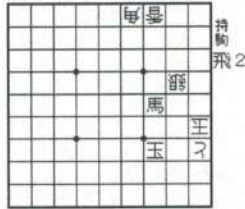
(例題3) 上田吉一 作



55馬、66香合、77桂、69香成、65桂まで5手。

解答選手権の過去問から2題、5手詰を例題として並べます。  
この例は、ピンされる駒が途中合駒として出てくるもの。2手目66香合の時点で、この香は馬でピンされていて動けません。ところが、3手目77桂とそのピンのラインに駒がはさまることによって、ピンが解除され（これがアンピン）、4手目69香成と動けるようになります。

(例題4) 若島正 作



14飛、同角、36飛、同角、26馬まで5手。

こちらは、問題図でピンされている攻め方の駒がアンピンされる例。攻め方の馬が香によってピンされていますが、2枚の飛を捨ててピンのラインに角をはさむことにより、アンピンされて最終手26馬と動けるようになって詰み、という仕掛けです。

2009-04-13 12:36 | [記事へ](#) | [コメント\(0\)](#) | [トラックバック\(0\)](#) |  
| TTT |  
トラックバックURL : <http://blog.zaq.ne.jp/propara/trackback/4/>  
※ブログ管理者が承認するまで表示されません

TTT02(選評)

詰将棋課題コンクール 第2回(選評)

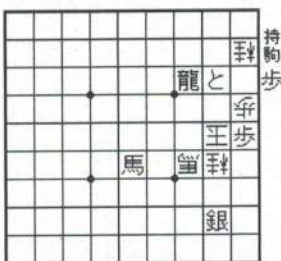
ジャッジ：高坂研

課題2A(複数解またはツイン。7手)……投稿7作

- 01 斎藤夏雄
- 02-03 馬屋原剛
- 04 則内誠一郎
- 05-07 山田康平

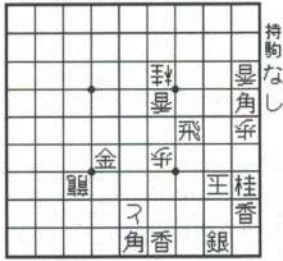
優秀作

2A01 斎藤夏雄 作 b) 15歩⇄36馬



- a) 34馬、15玉、24龍、同桂、16歩、同桂、24馬まで7手
- b) 34龍、16玉、38馬、同桂成、17歩、26玉、35龍まで7手

佳作  
2A06 山田康平 作 b)17桂→48桂



- a) 25飛、36玉、23飛成、45玉、36角、同玉、25龍まで7手
- b) 36角、37玉、63角成、47玉、37飛、同玉、36馬まで7手

このHPをご覧になるような方なら先刻ご存知とは思いますが、複数解（あるいはツイン）というのはチェスプロブレムの世界から拝借したテーマだ。特にヘルプメイトでは既にそれが標準設定となっており、複数解（あるいはツイン）でない作品を探すのが難しいくらいである。

では、彼らがそれほどまでにこの構成法にこだわるのは何故か？ それは一言で言うと、単解では表現不可能な解同士の有機的な関連性を表現できるからだ。キーワードは「対照性と統一性」。勿論、受賞作もこの観点から選んでみた。

2A-01は打歩詰をモチーフに、龍／馬の役割交換などの対照性が鮮やかに表現されている。また、手順と配置のバランスも良い。ただ、少し気になったのが15歩の配置。これはa)では無意味な配置になっているので、a)とb)を入れ替えてb)を15馬→36とした方が良かったかもしれない。尚、プロブレムの世界でも片方の解にしか働かない配置というのは認められているが、全ての配置がいずれの解でも最大限に機能するのが最上であることは言うまでも無い。

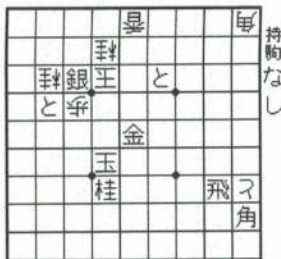
一番生真面目に対照的な作意を設定していたのは2A-06。配置は思い切り無理しているが（但し、作り方としてはこの方がプロブレムっぽい）作者の創意を買いたい。ここまでやったのなら、b)での角成も何とかして限定して欲しかったが…。

残りの作品は、やや対照性に対する意識が低いように思われた。

課題2B（アンピン、7手）……投稿15作

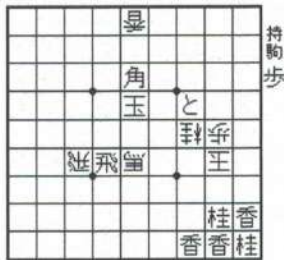
- 01 変寝夢
- 02 則内誠一郎
- 03 芹田修
- 04 上谷直希
- 05-08 岩田俊二
- 09-11 橋本守正
- 12-14 馬屋原剛
- 15 菊田裕司

優秀作  
2B06 岩田俊二 作



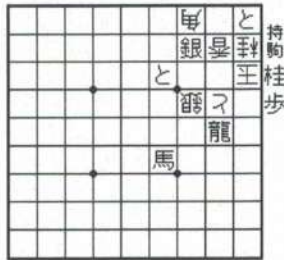
- 75桂、同桂、67飛、18と、76玉、67桂成、64金まで7手

佳作  
2B13 馬屋原剛 作



36桂、29馬、44桂、66飛、27歩、同桂成、52桂成まで7手

佳作  
2B02 則内誠一郎 作



23銀成、同玉、35桂、13玉、14歩、同と、23桂成まで7手

複数解と違って、アンピンは（これまで余り意識されなかつただけで）詰将棋の世界でも作例が沢山ある。本稿の最後に参考作品を幾つか挙げておいたので、興味のある方はこちらも参照して欲しい。ピンされていて動けない駒をわざわざ動けるようにしてやるというパラドキシカルな手順は、上手く作れば説明抜きで解者に面白さが伝わる筈だ。

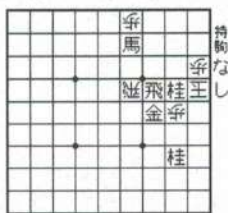
さて、今回の投稿の中で最も印象深かったのは2B-06だった。67桂の配置が実に巧い。紛れ順の22飛成と作意の67飛の対称性、55金を動かせるようにする手段の意外性など、どこを取っても一級品。文句なしの優秀作だ。（ただ、私なら4手目54桂を割り切るために玉方56歩を配したと思う）

アンピンの連続を桂の三段跳ねと結びつけた2B-13も面白い。「アンピンをどう表現しようか」と真面目に考えた人が多かった中、このようにアンピンで遊ぼうとしたのがエライ！まさしく発想の勝利だ。

やや地味ながらも、手堅くまとめているのは2B-02。アンピンの部分に飛躍はないが、捨駒主体の手順構成、そして適度な変化などは伝統詰将棋の良質の部分を感じさせる。

アンピンの参考作品

- (1) 森田正司 (詰パラ 昭和41年1月号)

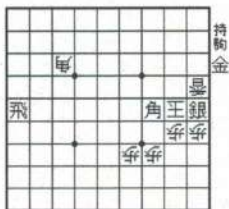


41馬、23桂、32桂成、34飛、15歩、同桂、33成桂まで7手

アンピンの意味付けを、打歩に求めている。

- (2) 山中龍雄 (詰パラ 昭和44年12月号)





53角成、45飛、35金、15玉、42馬、同飛、25金まで7手

こちらは大駒を中合で発生させて、それをアンピンする例。

(3) 山田嘉則 (詰バラ 昭和58年3月号) バカ詰5手



44飛、34香、24歩、36香、23歩成まで5手

最後はバカ詰での作例。  
(2009年4月9日)

【編集部より】

高坂さん、ありがとうございました。

今回も、TTT011に引き続いて、詰将棋の可能性を拡大させる作品が集まったのではないかと思います。投稿者の方々に感謝。

なお、次回のTTT03は、上田吉一さんがジャッジ。5月1日にアップします。楽しみにお待ちください。

## TTT03(出題)

2009年04月23日(木)

詰将棋課題コンクール 第3回(出題) (2009.4.23)

ジャッジ: 上田吉一  
締め切り: 2009.6.30

準備が整いましたので、予定より1週間早いのですが、第3回を開催します。

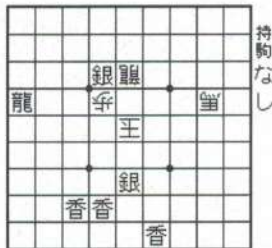
課題 3-A (出題: 伊藤正+若島正)

- \* 2手目に合駒の互いに異なる変化手順が少なくとも3通りある作品。9手以下。
- \* ただし、互いに異なる変化とは、その直後の攻め方の着手(この場合だと3手目)が異なることと定義する。
- \* そのテーマとなるそれぞれの変化手順において、別詰がないことが必要条件。
- \* テーマとなる変化手順は、等位(すなわち、駒が余らない、手数が同じ)であることが必要条件。
- \* 劣位(すなわち、駒が余る、手数が短い)の変化手順は、テーマのうちに入らない。

文章で書くと難しそうなので、例題で解説します。

(例題)

上田吉一 作 original



85龍、

- (1) 65香、同龍、同歩、56香、64玉、74銀成まで7手。
- (2) 65桂、56銀、同玉、76龍、57玉、67龍まで7手。
- (3) 65角、66銀、56玉、65龍、同歩、45角まで7手。

初手85龍に対して、香・桂・角と3種類の合駒による変化手順が分岐します。このとき、それぞれの詰め方は、互いに異なる手順(つまり、3手目が異なり、たとえば桂合のときの手順は角合のときに適用できない)であることを確認してください。

2手目65銀(もしくは金)は、同龍、同歩、56銀打、64玉、65香まで7手駒余りなので、劣位変化。従ってテーマのうちにはカウントされません。

従来の詰将棋のように、いわゆる「本手順」を設定する必要はありません。この例題の場合なら、あくまでも上記3通りの変化がひとまとまりとして「作意」です。投稿するときには、テーマとなる変化手順をすべてお書きください。

実は、こういう形でいわば「変化7種合」(!?)というのをやってみたかった、というのが発想のもとです。テーマを3種合から4種合というふうに合駒を1種類増やすだけで、創作難度はぐっと上がるようです。はたしてこの「変化7種合」を達成する勇士が出現するかどうか……。

その他にも、このテーマの発展形はいろいろと工夫できます。ぜひみなさまのイマジネーションを発揮していただくよう、多数のご投稿をお待ちします。

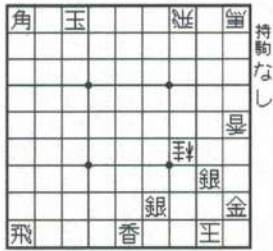
課題 3-B (出題: 若島正)

\* 作意手順のすべての着手の移動距離の和をできるかぎり大きくした作品。7手詰。

\* ただし、着手の移動距離とは、タテ・ヨコ・ナナメ1マスを「1」とする。桂が移動する着手の移動距離は「2」。持駒を打つ手の移動距離は「0」と定義する。

(例題1)

上田吉一 作 original

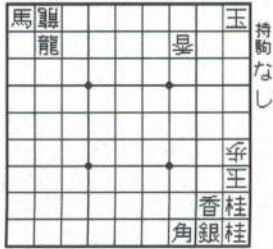


51香成、99馬、19角成まで3手。

3手の例題。着手の移動距離はすべて8なので、合計24。これはもちろん、3手詰としては最大です。それでは5手詰ではどうなるか。

(例題2)

上田吉一 作 original

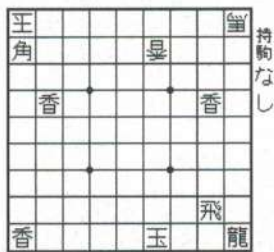


21香成、39香成、87龍、同龍、28馬まで5手。

これで7+7+5+6+7=32。相当なものですね。でも、まだまだ行けます。

(例題3)

上田吉一 作 original



47角成、99馬、11龍、同馬、98飛まで5手。

今度は5+8+8+8+7=36。作者の話では、これがおそらく限界だろうとのこと。

しかし、7手詰になるとどうなるのか、まったく想像が付きません。まずは40くらいを目標にしてスタートしてみてください。

達成した和の数によって、自動的に作品の順位が決まります。いわば同点の場合にのみ、ジャッジの判断が下されます。

作品やテーマの投稿は、次の宛先まで。

〒562-0005 箕面市新稲7-8-13 若島正

TTT03(選評)

2009年07月14日(火)

詰将棋課題コンクール 第3回(選評)

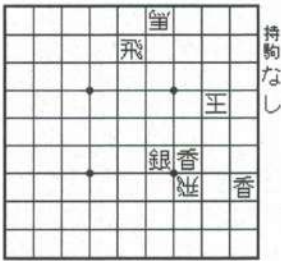
ジャッジ: 上田吉一

課題3A(2手目に合駒の互いに異なる変化手順が少なくとも3通りある作品。9手以下。テーマとなる変化手順は、等位(すなわち、駒が余らない、手数が同じ)であることが必要条件。)……投稿3作

- 01 高坂研
- 02 山田康平
- 03 橋本守正

優秀作

3A01 高坂研 作



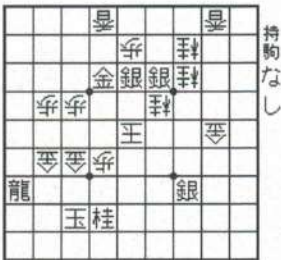
22飛成、

- (1) 23桂、13龍、25玉、16龍、24玉、14龍まで7手
- (2) 23金、35銀、25玉、23龍、同馬、26金まで7手
- (3) 23馬、同龍、同玉、41角、24玉、14角成まで7手

☆創作は難しい筈だが、本局は合駒を旨く割り切った所が良い。

佳作

3A03 橋本守正 作



57龍、

- (1) 56香、46龍、65玉、64銀成、75玉、55龍まで7手
- (2) 56銀、64銀不成、65玉、56龍、同桂、54銀打まで7手
- (3) 56角、同龍、同桂、73角、45玉、46角成まで7手
- (4) 56飛、46銀、65玉、56龍、同桂、55飛まで7手

☆4種の意欲は買うが、テーマが合駒なので、もう少し割り切ってほしかった。

課題3B(作意手順のすべての着手の移動距離の和をできるかぎり大きくした作品。7手詰。)……投稿10作

01-07 橋本守正

- 08 岩田俊二
- 09 馬屋原剛
- 10 原田慎一

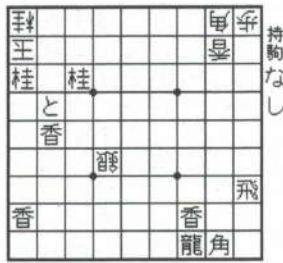
優秀作  
3B09 馬屋原剛 作



79龍、69香成、19龍、49香成、37馬、48香成、86馬まで7手  
 $8 + 8 + 8 + 6 + 6 + 6 + 6 + 5 = 47$

☆最長距離がテーマなので、自動的に優秀作です。

佳作  
3B08 岩田俊二 作



81桂左成、98角成、31香成、29香成、32龍、同馬、97飛まで7手  
 $2 + 7 + 7 + 7 + 7 + 7 + 6 + 8 = 44$

☆次点ということで佳作。

<総評>

3Aは多分投稿はないだろうと思っていたが、投稿があった。やはり、募集してみるものですねえ。3Bは、双玉ではない方が距離が長いという結果になった。尚5手の投稿がひとつあり(参考図)、優秀作もそうだが、私は入玉型を全く考えなかった。

参考図 馬屋原剛 作 original



59飛成、49香成、19飛成、29香成、28馬まで5手  
 $8 + 8 + 8 + 8 + 7 = 39$

【編集部より】

今回は、どうもテーマが難しかったようで、投稿数が減少しました。次回のTTT04は、もう少しとつきやすいテーマを設定してみるつもりです。山田嘉則さんがジャッジ。全国大会開催を祝って、7月20日にアップします。楽しみにお待ちください。

(追記) データに誤りがあり、7月15日に修正しました。

TTT04

2009年07月20日(月)

詰将棋課題コンクール 第4回 (出題) (2009. 7. 19)

ジャッジ: 山田嘉則

締め切り: 2009. 9. 30

詰将棋全国大会の開催に合わせて、予定を繰り上げて第4回を開催します。

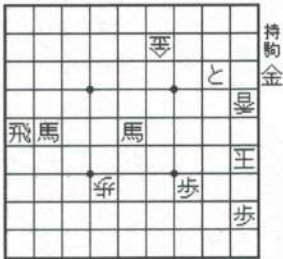
課題 4-A (出題: 山田嘉則+若島正)

\* 7手詰。Zilahi (ジラヒ)。

\* Zilahiとは、攻め方の2つの駒AとBについて、ある手順ではAを捨ててBで詰め、もうひとつの手順ではBを捨ててAで詰めるというテーマです。ただし、このテーマとなる手順2つは、等位(すなわち、駒が余らない、手数が同じ)であることが必要条件。

(例題1)

山田嘉則 作 original



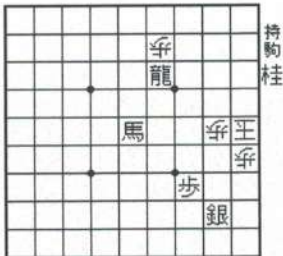
17金、

- (1) 15玉、33馬、同金、52馬まで5手。
- (2) 25玉、52馬、同金、44馬まで5手。

テーマとなる手順2つを、変化手順として設定した例。ここで盤面にある55馬と85馬をそれぞれA、Bとすると、(1)ではAを捨ててBで詰め、(2)ではBを捨ててAで詰めています(実際には、王手をかけているのは95飛ですが、あくまでも最終手を問題にしていることにご注意ください)。

(例題2)

高坂研 作 (TTT2 2009)



2解

- (1) 33馬、24角、27桂、26玉、46龍、同角、15馬まで7手。
- (2) 13龍、14飛、27桂、26玉、44馬、同飛、15龍まで7手。

すでにTTT2で例題として使った図ですが、Zilahiの好見本にもなっています。テーマとなる手順2つを、2解として設定した例。このように、複数解やツインでもかまいません。

この他にも、3つの駒と3つの手順に拡張して、

- (1) Aを捨ててBで詰める
- (2) Bを捨ててCで詰める
- (3) Cを捨ててAで詰める

という形にした、いわゆるCyclic Zilahiも可能です。みなさまの工夫を期待します。

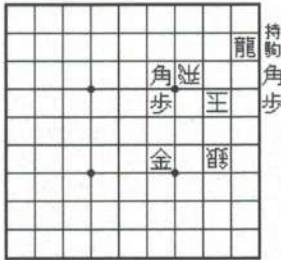
従来の詰将棋のように、いわゆる「本手順」を設定する必要はありません。投稿するときには、テーマとなる手順をすべてお書きください。

課題 4-B (出題: 山田嘉則)

\* 7手詰。4手目以降に、初形と1カ所だけ異なる局面が現れる。

(例題)

山田嘉則 作 original



25角成、同玉、16角、24玉、25歩、34玉、14龍まで7手。

どんな詰将棋でも、2手目の局面が初形とは1カ所だけ異なっているのはあたりまえですが、この課題では4手目以降を問題にしています。

4手目24玉の局面で、初形からそのまま43角→16角と移動した形になっています。これが課題として設定されているテーマ(まだ名称なし)です。この打ち換えの意味は、打歩の地点(いわゆるcritical point)を飛び越しておくことによる、打歩詰打開。これも珍しい手筋です。

こうした打ち換えの他に、邪魔駒原形消去(初形から攻め方の駒が1枚消える)とか、先打突歩詰(初形から攻め方の歩が1枚盤面に追加される)といった、従来からよく知られているテーマも、実はこの課題に相当します。

局面の小さな変化に、どのような意味づけを持たせるかが工夫のしどころかもしれません。多数のご応募をお待ちします。

作品やテーマの投稿は、次の宛先まで。  
〒562-0005 箕面市新稲7-8-13 若島正

**TTT04(選評)**

2009年10月31日(土)

詰将棋課題コンクール 第4回(選評)

ジャッジ: 山田嘉則

課題 4-A (出題: 山田嘉則+若島正)

\* 7手詰。Zilahi (ジラヒ)。

\* Zilahiとは、攻め方の2つの駒AとBについて、ある手順ではAを捨ててBで詰め、もうひとつの手順ではBを捨ててAで詰めるというテーマです。ただし、このテーマとなる手順2つは、等位(すなわち、駒が余らない、手数が同じ)であることが必要条件。

まずおわびをしなければなりません。

課題の難易度を見誤ったようです。

いくつかの課題候補の中から、

・5手の例題がすぐに作れた

・捨駒という詰将棋的要素を含んでいるので馴染みやすそう

という理由でZilahiを選んだわけですが誤算でした。

特に7手という手数設定が難易度を高くしてしまいましたようです。

その結果、応募作は3作。

しかもそれぞれが課題をクリアするための苦労をしのばせる作品でした。

応募を考えながら満足の行く作品ができず断念された方もおられたと思います。

申し訳ありませんでした。

投稿3作

01 松田圭市

02 太田慎一

03 高坂研

3作にはそれぞれに長所があります。

01

唯一、変化手順でテーマを実現した作品

02

7手のフルレンジでテーマを実現した作品

03

テーマを拡張し、AB、BC、CAという循環形式(cyclic pattern)で実現した作品

その一方でそれぞれに気になる点が…。

01、03

頭2手を省いて5手詰でテーマが成立している。

03の場合、初手からでなく3手目からの分岐というのは複数解の作品として減価事項。

02

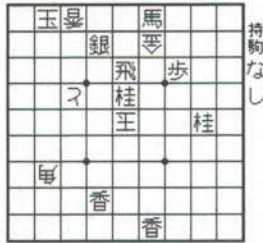
2解がほぼ同一手順。一見してZilahiと分らない。

このように、三者一長一短であり、選考には悩みました。

長考のすえ、03を優秀作、01、02を佳作と決めさせていただきました。

**優秀作****4A03 高坂研 作 (3解)**



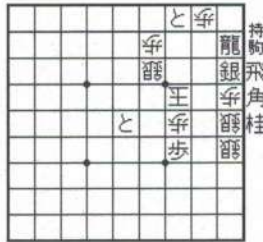


42桂成、54銀、  
 <1>46金、44玉、43飛成(A)、同銀、45金(B)まで  
 <2>56金(B)、同玉、23馬、55玉、45馬(C)まで  
 <3>66金、64玉、63馬(C)、同銀、55飛成(A)まで

cyclic Zilahiに加えて、3手目の46・56・66金という対比、という付加的要素があります。  
 この点で他の2作を凌いでいると見て、優秀作とします。  
 課題をここまで高めた作者に敬意を表します。

初手駒取りであったり、苦心をうかがわせる配置は7手という条件のしわ寄せでしょう。  
 5手という課題設定ならさらに完成度の高い作品が提出されていたと思います。  
 ジャッジとして忸怩たるものがあります。

佳作  
 4A01 松田圭市 作



33飛、同玉、25桂  
 同銀、44角、同銀、32龍まで  
 34玉、23龍、同玉、12角まで

伝統詰将棋の枠内で課題を表現している唯一の作品です。  
 手順も捨駒を主としたオーソドックスなものです。  
 7手にするための2手逆算も飛車捨てで無難にこなしています。  
 この課題にも関わらずこの普通さ、という点を高く評価したいと思えます。  
 佳作とするにふさわしい作品です。

佳作  
 4A02 太田慎一 作 (2解)



<1>75龍、同香、86香、同玉、76角成、同香、87香  
 <2>76龍、同香、86香、同玉、76角成、同香、87香

一見するとZilahiに見えませんが、以下のようにになっています。

<1>では初形で75にある香(A)を取って86に打ち76にある香(B)を87に打つ  
 <2>では初形で76にある香(B)を取って86に打ち75にある香(A)を87に打つ

Zilahiの拡大解釈なのですが、それは十分許容されると考えます。  
 その上で、どう拡大解釈するか、その上で何を実現するか、  
 ということで評価されるべきではないでしょうか。  
 この作品の場合、将棋ならではの拡大解釈、というのが注目すべき点です。  
 持駒のないチェスではこれではできません(キルケなどフェアリーでは可能)。  
 弱点は2つの手順の対比。実質同じ手順と言ってもよいでしょう。この

点では01、03に一步譲ります。

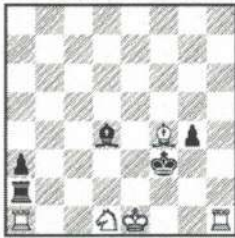
とはいえ、この作品は、繰り返しますが、7手のフルレンジで課題を実現した唯一の作品です。  
佳作に値すると思います。

Zilahiのような形式的なテーマは詰将棋の世界ではまだまだ馴染みが薄く、  
創作のノウハウの蓄積もないと思います。  
それゆえ、創作は困難であり、応募者にとっては迷惑な課題かもしれません。  
それでも、興味深い分野であり、詰将棋の可能性を広げる期待があります。  
今後もTTTで出題してほしいと願っています。

結果論ですが、7手ではなく、5手、あるいは7手以内、とすれば違っていたでしょう。  
より無理なく課題を実現した作品が集まったでしょう。  
過大な負担をかけてしまい申し訳なく思います。  
その中で応募いただいた3作品の作者には改めて感謝いたします。

本家のチェス・プロブレムでのZilahiについては、Abduramanovic氏の作品が若島氏によって紹介されています。  
図のみを掲載しておきます。  
詳しくは以下をごらんください。→ [海外書籍新刊紹介1](#)

2 F. Abdurahmanovic  
feenschach 1985 Comm



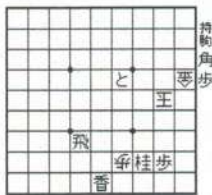
H#2 2 solutions (5+5)

ちなみにAbduramanovic氏の作品集、私も入手しました。  
初心者から上級者まで楽しめる、素晴らしい作品集です。お勧めします。

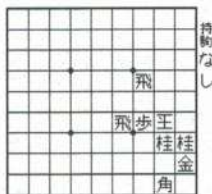
課題 4-B (出題: 山田嘉則)

\* 7手詰。4手目以降に、初形と1カ所だけ異なる局面が現れる。

このテーマは個人的には以前から意識していました。  
自作では次の作品があります。



43角、34歩、同角成、36玉、45馬、25玉、27飛、15玉、16歩、同玉、  
17飛、25玉、34馬、36玉、37歩、47玉、56馬まで  
(4手目と14手目で飛車の位置だけが異なる)



24飛、37玉、47飛、36玉、34飛、26玉、46飛まで  
(初形と詰上がりの違いは36歩の有無のみ)

詳しくは私のブログの記事「TTT04の元ネタ」をご参照下さい。

今回これを選んだのは、比較的敷居の低い課題だと考えたからです。

さて、課題を満たすこと自体は難しくありません。  
 そもそも形式的なテーマなので、内容をいかに盛るかです。  
 あるいは、どのようにアレンジするか、どんな付加価値をつけるか、です。  
 そこに工夫する余地、創造性を発揮する余地があります。

若島氏が出題時に  
 「局面の小さな変化に、どのような意味づけを持たせるかが工夫のしどころかもしれません。」  
 と述べておられるのは参考になります。  
 あるいは、この課題に限りませんが、別のテーマと組み合わせることも付加価値になります。  
 構想と言われる戦略的なテーマとのコンビネーションでもよいですし、もう一つの形式的なテーマでもよいでしょう。

ジャッジの立場でも、こうした工夫が評価のポイントになります。  
 もちろん作品の完成度、詰将棋としての美しさもあるにこしたことはありませんが、それはコンクールにおいて第二義的なものになります。

応募は12作。  
 長考を要した課題Aに比べ、こちらは優秀作・佳作とも比較的スムーズに決まりました。

- 投稿12作  
 01 松田圭市  
 02-06 馬屋原剛  
 07 山田康平  
 08 金子義隆  
 09 伊達悠  
 10-11 u-maku  
 12 沖昌幸

**優秀作**  
 4B07 山田康平 作



44飛、45飛、同飛、56玉、54飛、45玉



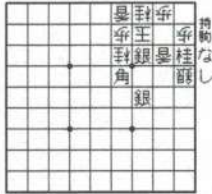
56金まで

玉の位置が変化。  
 しかも54飛が合駒を取って打ち直した飛車に入れ替わっています。  
 チェスプロブレムでのフェニックスのテーマ（駒が一度取られて同じ位置に甦る）とのコンビネーションです。  
 高度な狙いをエレガントに表現した傑作です。

**佳作**  
 4B06 馬屋原剛 作



22角成、同玉、33銀生、同玉、44角、32玉、33銀まで



今回では唯一、詰上がりでテーマを実現した作品です。  
 初形の角と銀が入れ替わった詰上がり。  
 不満はあります。  
 詰上がりとの対比を狙うのであれば、表現にもう一工夫あればさらによかったと思います。  
 仮にテーマを伏せて出題したとすると、見落とす人も多いのではないのでしょうか。  
 なお、同様の狙いの04、05に比べて、4筋の壁駒が目立つ悪形です。  
 それでも、詰上がりで実現した本作を取ります。

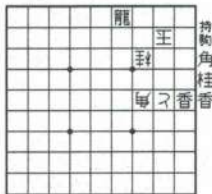
以下、残りの10作品を3つのグループに分けて紹介します。

(第1グループ)

今回のテーマは決して新奇なものではありません。  
 従来の詰将棋のテーマでも、形式的・抽象的に見るとこれにマッチするものがいくつもあります。  
 手数をかけて最小限の変化を得る、というのは詰将棋の基本的な技法なのでから当然とも言えるでしょう。  
 その極北に位置するのが『マイクロコスモス』や『新桃花源』を代表とする超長手数作品です。

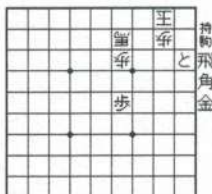
ということで、第1グループは従来の詰将棋のテーマで作られた作品群。もっとも素直で自然な解釈と言えるでしょう。  
 とはいえ、すでに素晴らしい先行作が多数あることはもちろん、この路線でテーマを強調するにはより長い手数が必要なのでしょう。  
 短手数では手筋物の範疇に接近し、コンクール上不利になることは否めません。

4B01 松田圭市 作



24香、同と、34桂、同と、11角、23玉、21龍まで

4B08 金子義隆 作



11飛、32玉、23角、同歩、21飛成、同玉、22金まで

守備駒移動です。  
 01は34地点を塞ぐ、08は22を空ける、という意味です。

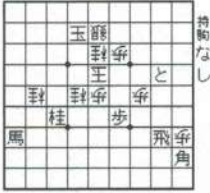
4B09 伊達悠 作



35桂、34玉、43桂生、23玉、24歩、32玉、31桂成まで

打ち歩詰打開です。  
34桂〜43桂生で馬筋を遮断します。

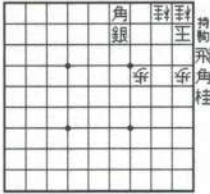
4B10 u-maku 作



64馬、44玉、54馬、同玉、97飛、54玉、94飛まで

邪魔駒消去です。大駒の動きを強調した作り方です。  
課題が7手なのが惜まれるところ。  
1手で捨てるか、5手以上かけて押し売りした方が馬捨てが引き立つように思います。

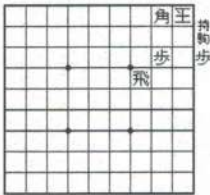
4B11 u-maku 作



32飛、13玉、22飛成、同玉、31角、12玉、24桂まで

玉の危険地帯への誘導です。  
2手目23玉は33飛成、12玉、24桂まで。

4B12 沖昌幸 作

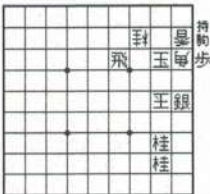


12歩、21玉、11歩成、同玉、31龍、12玉、22龍まで

邪魔駒消去。応募作中最少駒数ですが、手順は典型的でしょうか。  
手順重視のコンクールでは不利な作品かもしれません。

(第2グループ)  
攻方の駒を玉方の駒に変える、という工夫を見せてくれた作品です。

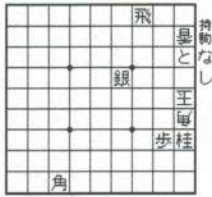
4B02 馬屋原剛 作



45飛成、35飛、36龍、同飛、26歩、同飛、14銀まで

森田手筋 (打歩詰を回避/打開するために歩を取る駒を合駒で発生させる)。  
7手の森田手筋は私の知る限りでも作例はいくつかありますが、まだまだ希少価値があるでしょうか。  
13角、12香の配置がうまいと思います。

4B03 馬屋原剛 作

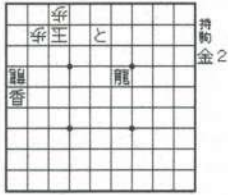


35飛成、25飛、24龍、同飛、同角、同玉、14飛まで

24角、同玉、21飛成は13玉で逃れ。  
一連の手順は飛車の打ち換えと見ることもできます。

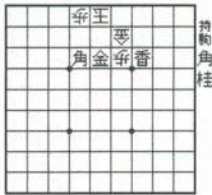
(第3グループ)  
形式的な表現に徹した作品です。

4B04 馬屋原剛 作



62金、81玉、72金打、同歩、71金、同玉、41龍まで

4B05 馬屋原剛 作



52角成、同金、63柱、同金、42角、41玉、31香成まで

佳作の4B06と同様、2枚の駒の位置が入れ替わるという表現。  
04では72玉と71歩、05では63角と42金が入れ替わります。  
徹底して形式的なのですが、こういう割り切りもあってよいと思いま  
す。  
04~06は奇しくも5, 6, 7手目の局面です。  
同一作者であれば3作セットでしょうか。

(あしがき)

このような機会を与えてくださった若島正氏、  
詰将棋全国大会でのプレゼンテーションをご許可いただいた、大会運営  
スタッフと全詰連関係者のみなさま、  
そして何より作品をご応募くださったみなさま、  
最後に本稿をご覧いただいたみなさまに感謝いたします。  
詰将棋課題コンクールが定着し発展することを願いつつ、TTT05ジャッジ  
の小林敏樹氏にバトンを託します。

2009/10/31 山田嘉則

【編集部より】  
投稿数から見るといささか寂しい結果に終わりましたが、作品として  
はいつものように「ふーん」と感心させてくれるようなものが集まった  
と思います。  
たいへん詳細な選評を書いていた山田嘉則さんに感謝!

TTT05 (出題) は、すぐにアップします。

2009/11/11

データ管理に不手際があり、選評を修正しました。  
冲昌幸さん、どうも申し訳ありませんでした。

TTT04 補遺

2009年11月08日(日)

審査結果の発表後、岩田俊二氏から若島氏にメールが。  
 「投稿、失敗したみたいです。残念。」  
 若島氏もメールのアーカイブを探されたようですが、見つからず。  
 送受信を巡る何らかのアクシデントのようです。

岩田氏の作品の取り扱いについて検討しましたが、審査結果は変更せず、参考作品として発表させていただくことにしました。  
 ご覧になってお分かりの通り、優秀作 / 佳作を受賞してもおかしくない作品です。  
 それだけによけいに残念ですが、この取り扱いを了解いただいた岩田氏には感謝いたします。

審査の公平を期するため、ジャッジには作者名や作者のコメントは抜きで作品のみ送られてきます。  
 ただし今回の作品については以上の経緯から作者のコメントを見ることができました。  
 せっかくなので引用します。

「初形と1カ所だけ異なる局面が現れる」とは、  
 「生駒が成駒になる」、「成駒が生駒になる」、「駒の向きが逆になる」、「駒が1枚増える」、「駒が1枚減る」、  
 「駒の位置が移動している」  
 という6つの場合が考えられ、それらを「攻駒」、「受駒」で表現すると12のパターンが考えられる。  
 投稿作の2パターンが実に難しく、最後まで残ったが、同じ手筋で出来たのは意外。  
 12作中、作るのが難しかったので、この2作を投稿作にしました。

岩田俊二

皇	科	龍	皇	皇	龍	科	皇	持駒なし
	科				金	銀	龍	
飛	角						王	
桂	飛						皇	
王								
			角					

26飛、15玉、86飛、26歩、16歩、同玉、49角まで

86飛、85角の両方が8筋から離れられない（チェスで言うhalf pin）こと、と金を合駒できないことを利用しています。  
 26とを歩に変え、二歩禁による合効かすの詰みに持ち込む、という手順です。

岩田俊二



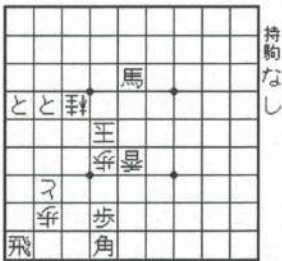
23歩成、24歩、13と、同玉、14歩、同玉、41馬まで

初手41馬は23合、同歩成、64香の逆王手。  
すなわちこの作品もhalf pinのメカニズムを使っています。  
やはり24歩により23歩合が二歩禁。  
41馬に対して23銀は無駄合でよいと思いますが、最終手なのでやや味が悪いかもしれませんね。

メールには他の10パターンの作品も参考図として挙げられていましたが、合駒制限を用いたこの2作品と違って無理のない構図でした。それだけこの2つのパターンが難しいということなのでしょう。

さらに番外編として次の作品を紹介します。

のんびりやさん



95飛、76玉、75飛、86玉、79飛、96玉、99飛まで

詰上がりでテーマを実現した作品です。  
玉が65から97に移動。一方攻方は飛車が1回転して元の位置に。  
応募作を含めて今回私が見る機会を得た作品では完成度がもっとも高いと思います。

作者は作品の出来に満足できず投稿をためらわれたとか。  
残念です。

私見ですが、このようなコンクールは参加することに意義があると思っています。  
質の高い作品を発表したい、という志は大事だと思いますが、それが高じてストイックになり過ぎることもあります。  
実力者の陥りやすい罠かもしれず、警戒の必要はあるのではないのでしょうか。

私もTTT05Iには応募したいと思っています。  
万が一にも優秀作が取れるレベルの作品はできませんが、それは問題ではありません。  
あなたも応募してみませんか？

(ジャッジ：山田嘉則)



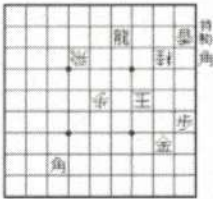
TTT05(出題)

詰将棋課題コンクール 第5回 (出題) (2009. 10. 31)

ジャッジ: 小林敏樹  
締め切り: 2009. 12. 31

課題 5-A (出題: 小林敏樹)  
\* 玉方の合駒を2手後に動かす。7手詰以内。

(例題 1)  
中原信治 作 (パラ1984/10)



68角、25玉、45龍、35金、34龍、同金、69角まで7手

当然ながら、合駒は王手をかけた駒によってピンされています。そこで、その王手駒を動かしてピンを外す形がまず考えられます。

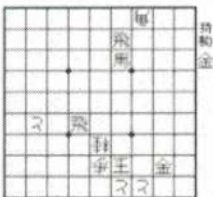
(例題 2)  
森本雄 作 (パラ1984/7)



69香、68馬、67馬、95馬、66馬まで5手

ピンのラインに別の攻駒をはさむことによって合駒を動けるようになるパターン。本作は移動中合を動かすというアクロバットです。なお、第2回の課題「アンピン」での作例もぜひ参考にしてください。

(例題 3)  
岡村孝雄 作 (パラ1988/4)



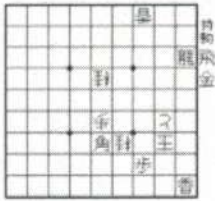
53馬、44香、47金、同香成、26馬まで5手

ピンラインに沿って中合を動かすというパターン。これだとアンピンは不要です。

課題 5-B (出題: 小林敏樹)

\* 攻方の駒を一手で8マス移動させる。9手詰以内。  
 \* ただし、その駒は  
 (1) 打った駒  
 (2) 限定移動の開き王手で動いた駒  
 のいずれかであること。

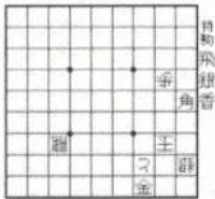
(例題4)  
 小林敏樹 作 (パラ1989/9)



37金、同と、21飛、38玉、29飛成、同玉、18龍まで7手

打った飛車を縦に8マス。

(例題5)  
 原田清実 作 (パラ2000/6)



26飛、37玉、48銀、同と、96飛、27玉、28香、17玉、26角、16玉、53角成、15玉、16飛、同玉、26馬まで15手

限定移動から横に8マス。(課題部分の手数はオーバーしていますが、仕上がりがきれいなので例題に掲げました)

(例題6)  
 小林敏樹 作 (パラ1992/2)



78銀、86玉、87銀、77玉、11角、87玉、96銀、同香、78角、98玉、99角成、同玉、89金まで13手

11角→99角成のパターン。テーマ部分は9手かかっています。

【編集部より】  
 いかにも短篇のスペシャリスト小林敏樹さんらしい課題が2題そろいました。  
 ぜひ多数のご応募をお待ちしています。  
 作品やテーマの投稿は、次の宛先まで。  
 〒562-0005 箕面市新稲7-8-13 若島正  
 e-mail: tadashi@hcn.zaq.ne.jp (@を半角に換えてください)。

また、このTTTも始めてからなんとか1年が経過しました。  
 とりあえず試行錯誤でやってみよう、というつもりで始めましたので、このあたりでマイナーなモデルチェンジをしてもいいかな、と思っています。  
 こうすればもっとおもしろくなる、というご意見がありましたら、ぜひ上記までお寄せください。

TTT05(選評)

2010年02月04日(木)

詰将棋課題コンクール 第5回(選評)

ジャッジ: 小林敏樹

課題 5-A (出題: 小林敏樹)

\* 玉方の合駒を2手後に動かす。7手詰以内。

実は、課題5-Bよりもこちらの方が作りやすいと思っていたので、投稿が5作だけとは意外でした。

例題に決定版のような作品をあげてしまったのが、創作的意欲をそいでしまった原因だとしたら、反省するよりありません。作品として優れていることだけでなく、与えられた課題で「どれだけぶっ飛んだ発想ができるか」あるいは「よくこのようなことを思いつくものだ」という観点がこのTTTの意義なので、例題に感わされることなく、思い通りに作っていただければよいのです。

この課題は短編詰将棋として作例の多いテーマなので、開発されつくして新しいものはもう残っていないのでしょうか？

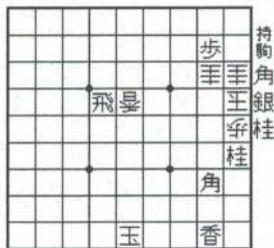
投稿作の中で印象に残ったのは、合駒を2回動かすというコンセプトで作られた2作でした。

投稿5作

- 01 則内誠一郎
- 02 山田康平
- 03 山田嘉則
- 04-05 岩田俊二

優秀作

5A03 山田嘉則 作



58角、47銀、36角、同銀不成、25銀、同銀、26桂まで7手

中合の銀をライン上に2回動かすパターン。意味はごく単純なのですが、この軌跡は文句なしに美しい。

初形王手の形や、桂を品切れにしなければならなかったり(47桂合!の防ぎ)と、構図にはやや不満が残るところです。

次作との比較に大いに悩みましたが、テーマ部分の美しさを重視して本作を優秀作と決定しました。

佳作

5A05 岩田俊二 作



45角、26銀、27角、35銀、47角、26玉、49角まで7手

本作では、35銀が2回動いてスイッチバック。その意味がシンプルな退路空けであるのがかえって新鮮な感じ。同様の構図で、先手の馬に対して26銀あるいは35銀と移動合する作品は過去に何かありますが、それらは質駒として取られるのを避ける意味がほとんどだったからです。

初手の駒取りが惜しいものの、収束は旨くまとめてあります。

短編で合駒を取らずに動かすという課題は、いうなれば創作の宝庫のようなもの。縛りを調節することで色々なものが作れるはず。例えば……

- ・合駒を後で動かす
- ・中合（変則合）を後で動かす
- ・移動中合を後で動かす
- ・移動不成中合を後で動かす

これに、2手後に動かすとか、2回動かす、といった条件を加えると難度が高くなります。色々と作ってみることをお勧めします。

課題 5-B (出題: 小林敏樹)

\* 攻方の駒を一手で8マス移動させる。9手詰以内。

\* ただし、その駒は

- (1) 打った駒
- (2) 限定移動の開き王手で動いた駒

のいずれかであること。

こちらの課題は応募12作と賑わいがあった嬉しい限りでした。表現の方法も様々なパターンが集まりましたので、できるだけ多くの作品を取り上げたいと思います。

投稿12作

- 01 則内誠一郎
- 02 山田康平
- 03-06 山田嘉則
- 07 風みどり
- 08-09 岩田俊二
- 10-12 太田慎一

優秀作

5B11 太田慎一 作



61飛成、77歩成、69龍、48玉、49香、39玉、41香成、69馬、49金まで9手

この作品には驚きました。この課題を2回達成する作品が現れるとは想定していませんでした。

41金を質に見ての61飛成から69龍。今度は、その龍を発射装置に使うて49香から41香成と金取り。この手順をよく9手で収めたものだと思います。

技術的に感心したのは87馬(+79金)の配置。このおかげで4手目に同馬と取る変化が入り、さらに龍が消える収束が実現しました。作意3手目に69金とすると、87馬が4筋に効いてきて不詰となる点もうまくできています。

佳作

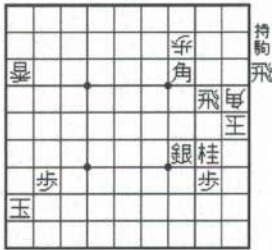
5B07 風みどり 作



94飛、25玉、15角成、同玉、14飛、同玉、24角成まで7手

初手は変化に備えた最速移動で、この場所でないとも2手目45玉の変化が詰みません。開き王手のための舞台をそのまま利用して、収束の角・飛連続捨駒につながるところがきれいで、模範的な作り方です。

佳作  
5B04 山田嘉則 作



94飛、33歩、95飛打、25角、14飛まで5手

初手は王手を防ぐために絶対ですが、続く95飛打で初手に動いた飛車をアンビンしてやるのが課題と関連した一手。セルフビン〜アンビンが最短手数で表現されています。

便利なせいか、初形で王手がかかった形が何作かありましたが、初手を得るため以外の工夫が見られたのは本作だけでした。

佳作  
5B06 山田嘉則 作



11角、65玉、57桂、76玉、67角、87玉、78金、98玉、99角成まで9手

本作での初手11角の意味付けは記憶がなく、ひょっとしたらオリジナルかもしれません。盤の右上部に何も置かれていないところが良い。

3手目以降は全くのベタ詰で終わってしまいますが、それが課題に合わせるためだったとしたら残念なことでした。作者にはぜひ後半を作り直していただいて、初手を活かした改作図を発表して欲しいものです。

以下、その他の表現をランダムに紹介しましょう。

5B03 山田嘉則 作



96飛、35歩、16飛まで3手

3手詰の作例としてはこちら。43角をピンしておく形に工夫が感じられます。

5B10 太田慎一 作



11角成、98玉、99馬まで3手

同じ3手でもこちらは前衛的。初手の角移動場所が①44より手前だと98玉！、②33角成だと78玉！、22角成だと96玉！で逃れ。したがって作意は11角成に決まるという、プロブレムで言うところのcorrectionになっています。右上の配置は作意で何をしているの？という不満はさておき、未来の可能性に期待。

5802 山田康平 作



ツイン b) 89玉→96玉

- a) 17飛、86玉、64角、96玉、97飛まで5手
- b) 11角、78玉、98飛、89玉、99角成まで5手

合駒の余地をなくしてしまって、簡単にテーマを実現させたのがこの作品。ツインでの表現は当然でしょう。

5809 岩田俊二 作



49香、52玉、32飛、同飛、96馬、62玉、63馬、51玉、41香成まで9手

初手49香に47歩合は42飛、31玉、47飛成・・・という有名なパターンを利用した作。

3手目の飛捨てまでは意欲満点だが、5手目以降が流れてしまった感じ。特に6手目の尾岐れ（51玉、41香成、62玉、63馬まで）は、肝心の香成のタイミングが非限定になってしまうので惜しい。

5801 則内誠一郎 作



11角成、89金、78角、98玉、99香、同金、同馬、同玉、89金まで9手

駒取りでの11角成。単純な作りではあっても、馬が99に戻ってくる感触はやはり気持ち良い。

攻駒を一手で8マスも移動させると、さすがに作った気分になるはず。今回、初めてこのようなテーマを作ってみた人がいたとしたら、この課題を出題した甲斐があったというものです。

テーマ部分から構成していく作り方をもっと多くの人に実感していただけるよう、次回以降の出題に期待します。

TTT06(出題)

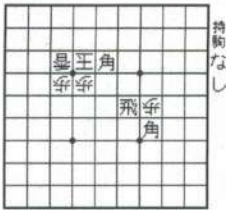
詰将棋課題コンクール 第6回(出題) (2010.2.4)

ジャッジ: 金子清志  
締め切り: 2010.3.31

課題A(出題: 若島正+金子清志)

\* 開王手(または両王手)で移動した駒が、移動先の位置で再度開王手(または両王手)に加担する。手数は25手以内。

(例題1)

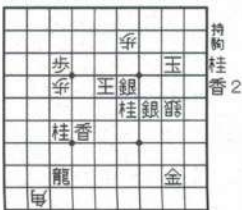


43飛成、36歩、71角成まで3手。

○初手で移動した飛(龍)が、移動先の43の位置で3手目の開王手に加担します。最短は3手でできます。

(例題2)

金子清志 作(詰将棋パラダイス 2009.11)

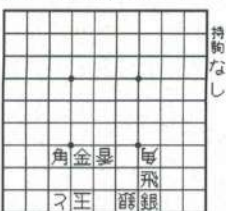


59香、45玉、49香、36玉、48桂、45玉、56桂、54玉、64桂、63玉、72桂成まで11手。

○7手目で移動した桂が、移動先の56の位置で9手目の開王手に加担し、9手目で移動した桂が、移動先の64の位置で11手目の開王手に加担します。

(課題に適合しない例)

青山雁 作(将棋ジャーナル 1989.5)



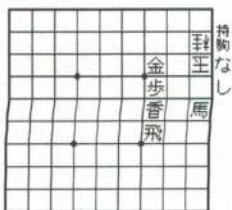
68金、59玉、78金、59玉、68飛、59玉、48飛、69玉、68金、59玉、58金、69玉、59金、同香成、68飛まで15手。

○金が動いて開王手と両王手が出てきますが、最初に動いた78の位置では両王手に加担できませんでしたので、課題に適合しません。

課題B (出題：金子清志)

\* 始点と終点が同じ攻方駒の移動を、2種類(以上)の駒で行う。25手以内。

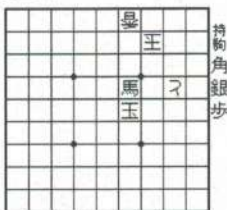
(例題1)



23金、同玉、33歩成、13玉、23と、同玉、33香成、13玉、23成香、同玉、33飛成まで11手。

○金&と&成香が、33から23に移動します。

(例題2)

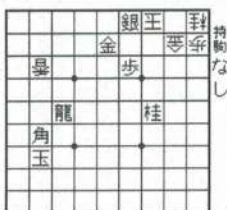


33銀、23玉、32角、13玉、22銀不成、12玉、21角成、23玉、32馬、同玉、33銀成、31玉、32歩、21玉、22成銀まで15手。

○銀&成銀が、33から22に移動します。

駒の「種類」は、広く解釈して頂いて構いません。

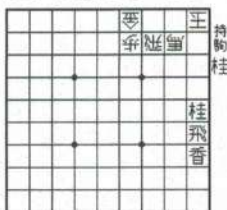
(例題3)



42歩成、21玉、31と、同玉、43桂不成、21玉、31桂成、同玉、35龍、21玉、31龍まで11手。

○歩&桂が43から31に移動、桂&龍が35から31に移動します。始点と終点が合っていれば、移動ルート(経由地)や移動手数は違っていても構いません。

(課題に適合しない例)



23桂不成、21玉、11桂成、31玉、23桂、同馬、21成桂、同玉、11飛成まで9手。

○桂は15から11に移動しますが、飛は「15(通り過ぎ)から11に移動」に適合しません。



## 【編集部より】

2年目を迎えたこの課題コンクール。ジャッジに金子清志さんをお迎えして、実験的に手数も25手までと、従来よりもひろげてみました。ただし、あくまでも要点がテーマの解釈とその表現にあることは、変わりありません。

いつもよりほんの少し創作期間が短くなりましたが、ぜひ多数のご応募をお待ちしています。

作品やテーマの投稿は、次の宛先まで。

〒562-0005 箕面市新稲7-8-13 若島正

e-mail: tadashi@hcn.zaq.ne.jp (@を半角に換えてください)。

2010-02-04 03:15 | [記事へ](#) | [コメント\(0\)](#) | [トラックバック\(0\)](#) |  
| III |  
トラックバックURL: <http://blog.zaq.ne.jp/propara/trackback/46/>  
※ブログ管理者が承認するまで表示されません

## TTT06(選評)訂正

2010年05月02日(日)

詰将棋課題コンクール 第6回(選評)

岩田俊二さんから6-Bへのご投稿が、審査から漏れていました。大変申し訳ありませんでした。

ここに追加して、お詫び申し上げます。(5.7 編集部)

ジャッジ: 金子清志

課題6-A(出題: 若島正+金子清志)

\* 開王手(または両王手)で移動した駒が、移動先の位置で再度開王手(または両王手)に加担する。手数は25手以内。

応募は8作。それぞれ楽しめるアイデアが盛り込まれていた。

2つの開王手の間をつなぐ手順の設定に苦労している作が多かった。

投稿8作

01-02 岩田俊二

03 会場健大

04 馬屋原剛

05-06 山田康平

07 山田嘉則

08 広瀬稔

優秀作

6A03 会場健大 作



57角、75歩合、同飛、83玉、74金、94玉、95歩、93玉、35飛まで9手。

「駒A+駒Bの開王手」から「駒B+駒Aの開王手」に、簡潔に構図を変換する。

それだけなら、比較的容易にできるだろう。

本作では、作意手順における課題達成のみならず、2手目桂捨合の変化手順と6手目93玉の変化手順において、同様に課題を満足する(かつ作意に登場しない)2種類の両王手が現れる。

佳作

6A08 広瀬稔 作



45と、同飛、65と、同飛、46玉、44玉、36玉まで7手

課題は、攻方の駒・玉方の駒との指定をしていないので、玉方の駒による（攻方玉に対する）王手による作の応募は予想していたが、本作は攻方、玉方の両方で実現した作である。

両方を実現した作の応募は他にもあったが、この短手数での実現を評価する。

1～4手目と5～7手目を実現する2つの構図は、それぞれ単体では既知のものであり、4手目の局面から攻方玉が移動して収束に向かう例もある。合駒制限をすればこんなに短手数で接合できるのだった。

他に、目にとまった2作を紹介。

6A06 山田康平 作



21飛不成、23歩、同飛不成、35玉、52桂成、34玉、53成桂、61銀、35歩、同玉、43成桂、62銀、36歩、34玉、44成桂、同玉、43飛成まで19手

成った桂が鋸引で原位置に戻ってくる。飛不成をからめて収束は決まったが、決まり手の44成桂が両王手にならなくなってしまった。

6A07 山田嘉則 作



29飛、35金、24角、23玉、35角、25金、24金、同金、同飛、33玉、23飛成、同玉、24金まで13手

24を交点にした飛角の開王手2回だが、捨合で手をつなぐのではなく、35角をあっさり置きなおすのがアイデア。10手目が13玉になるように作れば、最後の23飛を両王手にできそうだ。

課題6-B (出題：金子清志)

\* 始点と終点が同じ攻方駒の移動を、2種類（以上）の駒で行う。25手以内。

応募は4作。課題達成が難しかったか、課題自体が魅力的でなかったか。

「2解」は考えなかった。その他には出題側が思いもよらなかった、というような手順での応募はなかった。

予想していたものの例：

- 特急・急行・各駅 — 出発したのと違う順番で到着する
- 手順によって終点が違う — 変化、偽作意など
- 入れ替え — 後から出発する駒が邪魔駒（先に出発した駒は戻ってく

る)

○ 始点と終点が同じ位置 — こういう頓知は好きな人がいると思ったが

投稿 4 作

01 馬屋原剛

02-03 山田康平

04 岩田俊二

優秀作

6B03 山田康平 作



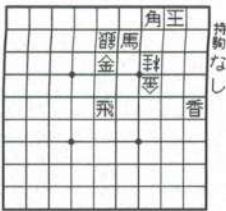
11龍、82玉、91龍、同玉、19角、82金、83桂、81玉、44香、27歩成、93桂、同金、91角成まで13手

盤面最遠の2隅間で、純粹邪魔駒消去をして、跡地に最遠打、そして最遠成り捨て。2種の駒での表現としては、ひとつの究極といえる。

最遠打を作るためだけの配置が目につくが、91角成を作るのは同じくらい難しいので、この程度の盤面で済めば良しとしたものであろう。

応募が少ないので、他の作もすべて紹介する。

6B02 山田康平 作 (2解)



12香成、同玉、15飛、21玉、32馬、同玉、12飛成、31玉、42金まで9手  
32馬、同玉、42金、21玉、32金、同玉、52飛成、31玉、22銀まで9手

2解での表現。両方の手順とも課題を達成しており、なかなか器用なことをするものだ。

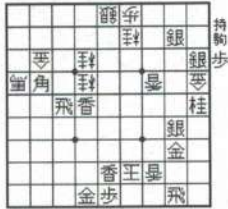
6B01 馬屋原剛 作



51香成、同玉、43桂不成、61玉、59角、65歩、51桂成、同玉、15角、61玉、51角成、同玉、59飛、61玉、72桂成、同歩、62歩、71玉、51飛成まで19手

最遠2地点間で3種類は、かなり欲張った表現で、苦心作ではあると思う。

6B04 岩田俊二 作



49歩、47玉、77飛、67歩、48歩、46玉、47歩、45玉、46歩、44玉、45歩、43玉、44歩、32玉、43歩成、同玉、49飛、32玉、23桂成、同玉、43飛成まで21手。

遅い移動（歩）と速い移動（飛）の対比である。

課題部分は最短で表現されており、速い動きの方が無駄なく収束と直結しているのも好印象。

49歩配置からスタートしても課題は満足できるが、「打」から入ったのが作者の狙いか。

ちなみに、本図では歩を途中で取ると飛寄に合利かずで詰んでしまうが、ここに合駒の変化を作って「どの変化も課題達成」とか如何だろうか（かなり面倒そうだが）。

<総評>

今回は「回数を稼ぐ」ことが狙いになる課題が2つであったこともあり、これまでより上限手数を長くしてみた。25手としたのは、それより長いと検討が難しい（柿木で解けない可能性が高くなる）ため、25という数字には積極的な意味はない。自由度が高くなって良いかと思っていたが、その反面、手順と手数が見合っていない作も見られた。

過去の課題（特にTTT05B）の影響を受けたような作が多かったように思うが、気のせいだろうか。

---

<編集部より>

この詰将棋課題コンクールも、始めてからちょうど1年が経過しました。まだまだ投稿数は少ないですが、少しずつ認知されてきたのではないのでしょうか。

編集長の若島が多忙のため、ここでしばらくお休みをいただき、また夏頃に再開したいと思っています。それまでしばらくお待ちを。

TTT07(出題)

2010年09月03日(金)

詰将棋課題コンクール 第7回(出題) (2010.9.3)

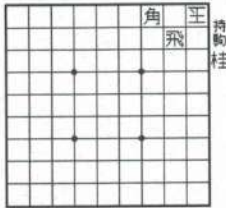
ジャッジ: 若島正  
締め切り: 2010.10.31

課題(出題: 若島正)

\* 問題図の盤面配置駒すべてを含む最小の矩形をXとする。作意手順に、Xの枠外の着手を含む作品を求む。手数は11手以内。

今回から、毎回の出題を2題から1題に減らしました。  
手数も、一桁ではなく、ほんの少しだけ余裕を持たせてみました。

(例題1)



23柱まで1手。

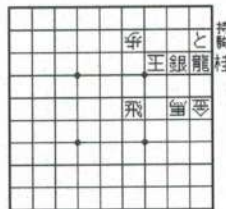
○最短手数は当然ながら1手。配置駒すべてを含む最小の矩形Xとは、この場合11-12-32-31-11を結ぶ長方形のことです。23柱は、この長方形の枠外の着手なので、課題の条件に適していることとなります。

しかし言うまでもなく、これはただ条件を満たしているだけ。自由な想像力を発揮してほしいのは、それをどうテーマ化するか、という問題です。

手数が長いために例題にはなりません、参考として自作を2局引用しておきます。

(参考1)

若島正(将棋世界 1991.3)

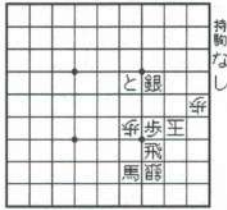


22龍、24玉、36柱、同馬、44飛、25玉、14銀成、16玉、15成銀、同玉、14飛、同玉、25金、同馬、13龍まで15手。

○いったん枠の外に玉を追い出してから、ふたたび枠内に戻すのが狙い。詰め上りが、問題図と同じ4x4の枠に戻り、13龍と25馬がスイッチバックしているところにもご注目。

(参考2)

若島正(近代将棋 1979.12 version)



97飛、36玉、37飛、26玉、38飛、16玉、25銀、同玉、28飛、14玉、58馬、47桂、同馬、同歩成、23銀、13玉、25桂、23玉、33桂成、14玉、23飛成まで21手。

○初手の97飛の限定移動（理由は省略）を大きく見せるために、意識的に枠Xを右半分に小さく絞った例。

ついでにここで告白しておきますと、看寿賞を受賞した拙作「ルービック・キューブ」にも、こうした「枠の外に出る着手をどう見せるか」という問題意識が働いています。

ぜひ多数のご応募をお待ちしています。  
 作品やテーマの投稿は、次の宛先まで。  
 〒562-0005 箕面市新稲7-8-13 若島正  
 e-mail: tadashi@hcn.zaq.ne.jp (@を半角に換えてください)。

2010-09-03 15:35 | [記事へ](#) | [コメント\(0\)](#) | [トラックバック\(0\)](#) |  
 | [III](#) |  
 トラックバックURL: <http://blog.zaq.ne.jp/propara/trackback/61/>  
 ※ブログ管理者が承認するまで表示されません

TTT07 (選評)

2011年03月22日(火)

詰将棋課題コンクール 第7回 (選評) (2011.3.22)  
 ジャッジ: 若島正

本来は昨年中に結果を報告するはずでしたが、本ブログの更新がすっかり滞ってしまい、ここまで発表が遅延したことを投稿者の方々に深くお詫びします。

課題7 (出題: 若島正)

\* 問題図の盤面配置駒すべてを含む最小の矩形をXとする。作意手順に、Xの枠外の着手を含む作品を求む。手数は11手以内。

応募はわずか3作。どうも課題が適当ではなかったようで、反省しています。  
 独自の切り口を提示した作品はありませんでした。

- 投稿3作  
 01 岩田俊二  
 02 山田康平  
 03 渡辺秀行

優秀作  
 7-01 岩田俊二 作

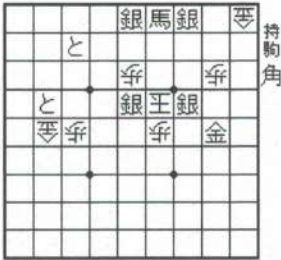


91角成、49玉、39飛、同玉、93角、38玉、39歩、27玉、28歩、26玉、71角成まで11手。

5 x 5のサイズで、91角成という最長限定移動を実現した作品。手品のタネは、初手73角成なら93角のときに84歩合！同角成、38玉、39歩、27玉、28歩、26玉で不詰となる仕掛け（48馬は37桂成、同馬引、25玉で逃げられてしまう）。

この二枚角のダブリには、まだまだ工夫の余地がありそうだとすることを予感させてくれる。

佳作  
7-02 山田康平 作



99角、54玉、43銀不成、同玉、32馬、同玉、42銀左成、21玉、11角成、同玉、22金まで11手

こちらは初手に遠角。仕掛けはよくあるもので、4手目65玉なら74馬、76玉、85馬、87玉、88金まで、という意味。88歩合という中合の変化処理は、同角、54玉のとき32馬、64玉、65歩、63玉、62とまで。

この遠角を、99→11と最長に動かすのが狙い。ただし、それはこの課題コンクールのTTT05Bの課題だったので、妙な既視感があり、かえって損をしているのかも。

<編集部より>

この詰将棋課題コンクールは、しばらくお休みをいただきます。再登場するときには、新しい形でお目見えすることになるかと思えます（たとえば、『この詰将棋がすごい！』の企画として仕立て直すことも考えています）。